

幼児期健忘と最初期記憶に関する研究の現在

森 津太子

A review of the Literature on Childhood Amnesia and the Earliest Memory

MORI Tsutako

Abstract : Most people have difficulty remembering events that occurred in their first years of life. Such a phenomenon has been studied for about 100 years since Freud termed it “childhood/infantile amnesia”. This article reviews the literature on the earliest memory, the emergence of which indicates the end of the childhood amnesia period, and examines current theories of childhood amnesia. A variety of theories of childhood amnesia were divided into three categories for discussion (the retrieval failure theory, the encoding/retention failure theory, and the social interactive theory) from the perspective of whether the theory assumes that memory is a permanent storage system or not (i.e., the retrieval failure theory vs. the encoding retention failure theory) and whether the theory assumes that memory is an intrapersonal process or an interpersonal process (i.e., the retrieval failure theory and the encoding/retention failure theory vs. the social interaction theory). Finally, the implications of childhood amnesia for recovered memory and future directions are discussed.

Key Words : childhood amnesia, the earliest memory, recovered memory

「永いあいだ、私は自分が生まれたときの光景を見たことがあると言いつ張っていた。」

三島由紀夫の「仮面の告白」(三島, 1950)は、この一節から始まる。そして、「自分の目で見た^{たらい}と思われない」記憶として、産湯を使わされた「盥のふち」にさす光のことをありありと回想している。

しかし我々が皆、三島のように、人生における最初の記憶として、自身の誕生時の様子を想起できるわけではない。むしろ誕生時の記憶を報告する例は極めてまれで、一般には、誕生後の一定期間に起きた出来事について想起することはできない。こうした現象は、幼児期健忘 (childhood amnesia または infantile amnesia) と呼ばれ、古くから研究が行われてきた (過去のレビューとして、Dudycha & Dudycha (1941), Pillemer & White (1989), White & Pillemer (1979))。

ある出来事の記憶は、それが経験されたときから時間が経過するほど再生されにくい。これは、大人にもあてはまる記憶の一般的な法則だが、幼児期健忘の場合、こうした単純な法則では説明しきれない部分が多

い (Wetzler & Sweeney, 1986)。例えば、四十歳の人が十五年前の出来事を思い出すことはできても、十七歳の青年が十五年前を思い出すことはできないのである (佐藤, 2001)。しかも、誕生後の数年は、特に新しい経験が豊富な時期であり、そうした経験が一切想起できないというのは一種のパラドックスとも言える。こうしたことから、幼児期健忘は、多くの研究者の関心を惹きつけ、さまざまな理論が提出されてきた。特に最近では、かつて困難とされていた乳幼児の認知発達研究が飛躍的な進歩を遂げたことを受け、幼児期健忘に関する理論にも新たな動きが出てきた。本論文では、幼児期健忘の終結を示す人生最初の記憶 (以下、最初期記憶と呼ぶ) に関する研究をまず概観し、その後、幼児期健忘をめぐるこれまでの理論とその含意を考察する。

最初期記憶

最初期記憶の年齢 ～幼児期健忘の終結年齢

最初期記憶 (the earliest memory) とは、自身の記憶を遡った際に想起される最も早い時期の記憶のことで、すなわち幼児期健忘の終結を示すものと考えられる。幼児期健忘という現象を最初に指摘し、また命名したのは Freud (1905/1953) とされるが、彼が最初期記憶として想起される出来事の経験年齢を 6, 7 歳としたのに対し、その後の研究は、3, 4 歳を平均的な年齢としたものが多い (Dudycha & Dudycha, 1941; Waldfogel, 1948)。

代表的なものとして、Waldfogel (1948) は、大学生 124 名 (男性 48 名, 女性 76 名) に、生後 8 年間の記憶を再生させ、それぞれの出来事が生じた年齢を推定させたところ、3 歳以前の出来事が再生されるケースは少ないこと、また年齢とともに一貫して再生数が増えていくことを示している。こうした結果は、最近の研究でも追認されている (Howes, Siegel, & Brown, 1993; Kihlstrom & Harackiewicz, 1982; 森, 2002; Mullen, 1994)。例えば、森 (2002) は、女子大学生 126 名に、最も初期のものと思われる記憶を記述させ、その時の年齢を推定させたところ、3-4 歳のものが最も多く (図 1)、全体の約 42% を占めていた。

一方、最初の記憶を自由に想起させるのではなく、日付の特定できる出来事について、一連の質問をすることで、その時の記憶が実際に残っているかどうかを確認するという手法も使われている (Eacott & Crawley, 1998; Eacott & Crawley, 1999; Sheingold & Tenney, 1982; User & Neisser, 1993; Winograd & Killinger, 1982)。例えば、User and Neisser (1993) は、大学生 222 名 (女性 136 名, 男性 86 名) に、「弟妹の誕生」「入院」「家族の死」「引っ越し」の経験についての質問をしたところ、弟妹の誕生と入院については、それを 2 歳に経験した場合でも、当時の記憶が十分に残っているとしている。こうした研究では、自由再生を使った研究に比べ、若干早い時期の記憶が確認されることがあるが、これまでの研究結果をまとめた Rubin (2000) によると、方法論による差はあまり大きくないという。

このように研究知見はある程度一致しているように見えるが、最初期記憶の年齢を何歳と考えるかには、なお問題が残されている。第一に、各研究で提示されている最初期年齢は、あくまで平均値 (もしくは最頻

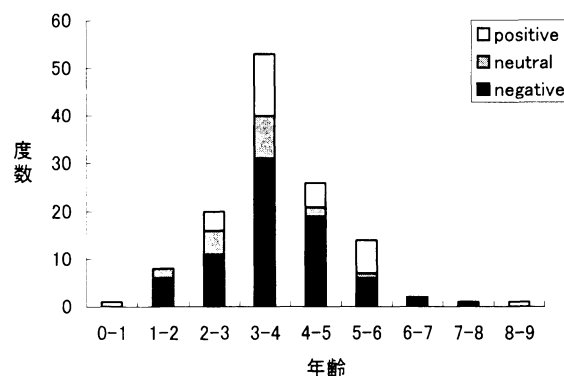


図 1 最初の記憶の推定年齢と感情価 (森, 2002)

値) であり、すべての人がこの年齢の記憶を最初期記憶として想起するわけではない。多くの研究では、三島の例のように、1 歳未満の記憶を想起する例がわずかではあるが存在しているし、反対に、最初の記憶が 5, 6 歳のものであるケースも少なくない (図 1 参照)。第二に、最初期記憶の年齢には性差や、文化差があるということである。性差を検討した研究では、女性の方が最初期記憶の年齢が早い傾向が見られている。例えば、最初期記憶の平均的な年齢は、Dudycha & Dudycha (1933) の研究で男子 3 歳 8 ヶ月, 女子 3 歳 6 ヶ月, Howes, et al. (1993) で男子 3.4 歳, 女子 3.07 歳, となっている (同様の結果として, Mullen (1994), Potwin (1901) など)。一方、文化差を検討した Mullen (1994) の研究では、白人の方がアジア人より最初期記憶の年齢が低いことも示されている。第三の問題としては、最初期記憶として想起された記憶が、本当に、自分の経験によってできた記憶なのかかわからないことがある。我々の記憶の少なくとも一部は、外部ソースからの情報によって構成されている。したがって、例えば、経験した出来事が、家族の中で繰り返し語られる場合、そこで得られた情報が、記憶を形づくっている可能性もある。多くの研究では、最初期記憶を想起する際、自分自身の記憶を想起するよう教示され、外部ソースから生まれた可能性がある記憶は排除するように言われる。しかし、実際には、両者を区別するのは、記憶を想起する本人にとっても容易なことではない (Loftus, 1993 a)。最後に、記憶を想起する環境が適切ではないという指摘もある。すなわち、ほとんどの研究では、記憶が想起される場所が、大学の実験室や教室という日常的な文脈とはかけ離れた場所であり、また、そうした場所で、見知らぬ実験者に今すぐ幼児期のことを思い出すようにと言われても、適切な想起ができないのではないかという指摘である (Pillemer, 1998)。

以上、これらの問題を考えると、幼児期健忘については、その終結年齢という基礎的な情報ですら、まだ確定していないことがわかる。しかし後に述べるように、幼児期健忘の終結年齢は、こうした現象がなぜ起こるのかという理論的な説明の重要な根拠であるし、また「回復された記憶」などの現実的な問題を解決する際にも、大きな示唆を与えるものである。したがって、この問題に関しては早急な解決が必要であろう。一方で、終結年齢に個人差や想起状況による差異があることを、追求していくことも重要である。こうした差異がより明確に示されれば、それが幼児期健忘の謎を解く鍵になる可能性もあるからである。例えば、女性が男性より終結年齢が低いという結果は、後に示す「社会相互作用理論」の傍証とも考えられている。

最初期記憶の内容と感情価

幼児期の記憶として想起される内容にはある程度の共通性が認められており、Waldfoegel (1948) は、その内容を表1のように分類している。このうち森 (2002) の研究では、最初期記憶として、特にけがや病気に関する記憶（階段からの落下、骨折、やけどなど）が多く想起されることを確認している（同様の結果として、Howes, et al. (1993)）。ただし、幼児期の記憶は、断片的なものや不完全なものが多く、表1のような枠組みで必ずしも明確に分類できるわけではない。また、複数の項目にまたがる記憶も多く、どういった記憶が再生されやすいかを特定することは容易ではない。さらに、大人にとっては記憶に残るような出来事が、子どもにとっては必ずしもそうではないということも特徴的と言える。記憶再生の手がかりとして「弟妹の誕生」「入院」「家族の死」「引っ越し」といった出来事が利用されることはすでに述べたが、こうした大人にとっては重要で忘れがたいと思われる出来事が、最初期の記憶として自発的に想起させるケースは必ずしも多くないのである。逆に、大人にとっては日常生活の一部にすぎない些細な出来事が想起される場合も多い (Kihlstrom & Harackiewicz, 1982)。

想起された出来事に感情が伴うケースは多いが、それがポジティブであるかネガティブであるかは、研究によって結果が分かれている。例えば、Waldfoegel (1948) は、ポジティブ事象の再生が全体の約 50% を占め、ネガティブ事象は約 30%、ニュートラル事象は約 20% であったと報告しているが（同様に、ポジティブ事象を多く報告したものとして、Kihlstrom & Harackiewicz (1982), Potwin (1901) など）、森 (2002)

表1 よく想起される経験 (Waldfoegel (1948) より作成)

- | |
|-----------------------------|
| A. 個人的な経験、感情、態度などの記憶 |
| 1. 成功、達成 |
| 2. 失敗、欲求不満、剝奪 |
| 3. 恐れ、心配、罪の意識 |
| 4. 当惑、屈辱 |
| 5. 畏怖、驚き、好奇心、混乱 |
| 6. 性的感情、性愛的な愛着 |
| 7. お気に入りの持ち物：おもちゃ、ペット、衣服など |
| 8. けが、病気 |
| 9. 夢、悪夢 |
| B. 家族（親類を含む）に関連した記憶 |
| 1. 家族の成員に対する感情、態度 |
| 2. 家族の習慣、活動 |
| 3. 家族の葛藤：両親、兄弟姉妹 |
| 4. 弟妹の誕生 |
| 5. 親のしつけ、罰 |
| 6. 家族成員の病気、けが、死 |
| C. 近所の人々に関連した記憶 |
| 1. 友達、近所の人 |
| 2. 近所の人との遊び、活動 |
| 3. 口論、けんか |
| 4. 興奮する出来事：事件、火事、醜聞など |
| 5. 新しい地域への引っ越し |
| D. 学校や教会に関連する出来事 |
| 1. 先生 |
| 2. クラスメート |
| 3. 活動：遊び、授業、スポーツ、お祭りなど |
| 4. 好きな科目 |
| 5. 叱られた出来事 |
| 6. 当惑する出来事 |
| 7. 昇進と失敗 |
| E. リクリエーション活動に関連する記憶 |
| 1. 旅、休暇 |
| 2. パーティー、休日（プレゼントをもらうことを含む） |
| 3. ピクニック、遠足 |
| 4. 家族や親戚の家への訪問（訪問される場合も含む） |
| 5. ショー、サーカス、お祭り |
| 6. 特別なもてなし |

の研究では、全記憶のうち約 60% がネガティブ事象、約 25% がポジティブ事象、約 15% がニュートラル事象で、Waldfoegel の結果とは反対の結果になっている（図1を参照。同様に、ネガティブ事象を多く報告したものとして、Dudycha & Dudycha (1933), Howes, et al. (1993) などがある）。

最初期記憶の正確性

最初期の記憶がどの程度正確なものかについては、これまでいくつかの研究がなされており、概ね、想起された記憶は正確であることを示している。例えば、Howes, et al. (1993) は、被験者が最初期記憶として想起した出来事に、当時一緒に居合わせた人物にも、その出来事について思い出してもらい、両者の記憶内容のずれを調べている。その結果、得られた全記憶のうち 60%（居合わせた人物の確認がとれた記憶の 80%）が正確、もしくはほぼ正確と判断された（同様の結果として、Usher & Neisser (1993)）。しかし、正確

と判断された記憶の裏には、当然、正確ではない、もしくは歪んでいると判断された記憶も存在している。Howes, et al. (1993) の場合、こうした“歪曲した”記憶は全記憶中 13% あったと報告している。Howes らは、この数字に含まれる記憶の歪みは、中心的な要素におけるものではなく、些細なものが大多数をしめるとしているが、この数字を多いとするか少ないとするかは判断が分かれるところであろう。

正確性を調べる研究については、方法自体が適切ではないという指摘もある (e.g., Loftus, 1993 a)。例えば、こうした研究では、被験者の記憶の正確性を確認する基準として、想起された出来事を一緒に経験した人の記憶内容を使っている。すなわち、基準とされた記憶は、被験者の記憶に比べ正確であるという前提のもとに、最初期記憶の正確性が調べられるわけだが、基準となる記憶が本当に真実であるという保証はない。さらに、想起された出来事を一緒に経験した人というのは、多くの場合、被験者の親であるため、ここで想起された記憶内容は、研究以前にも繰り返し親子で話された可能性がある。もしそうであるならば、被験者によって想起された記憶（子の記憶）と、基準となる記憶（親の記憶）とが類似するのは、その正確性ゆえではなく、両者のコミュニケーションの産物ということになる。

幼児期健忘のメカニズム

前節では、最初期記憶について、これまで明らかになっていることを年齢、内容、正確性という点から議論した。では、最初期記憶以前の記憶はなぜ想起できないのであろうか。こうした問いに対しては、これまで多くの説明がなされてきたが、そこで争点の一つとなるのは、幼児期健忘は記憶の検索の失敗なのか、それとも符号化や保持の失敗なのかという点である (Howe & Courage, 1993; Loftus & Loftus, 1980; 尾原・小谷津, 1994)。

記憶検索の失敗であるという説

記憶の貯蔵がもし永続的なものなら、初期の経験が再生できないのは記憶検索の問題ということになる。これは、裏を返せば、適切な状況さえを整えば、幼児期健忘の期間の記憶も再生されるかもしれないという可能性を示唆する。こうした考えの中で最も有名なものが Freud (1905/1953, 1916/1963) の説である。彼は、幼児期健忘は乳幼児期に経験したトラウマを抑圧する

ための積極的な過程と考えた。すなわち、幼少期の記憶は意識の届かない場所に追いやられており、そのために容易に想起することはできないが、実際には、元のかたちのまま残っているという考えである。

現在では、Freud の理論を幼児期健忘の原因とする考えは否定されている。しかし、本人の意識的な気づきがないところで過去の記憶が保持されているという考えは、別のかたちで現在の記憶理論の中にも見られる。例えば、近年活発に研究が進められている潜在記憶の研究では、我々の記憶には想起の際に意識を伴う通常の記憶（顕在記憶）のほかに、意識を伴わない潜在的な記憶があると考えられている (Schacter, 1987)。そして、潜在記憶は誕生直後から存在し、乳幼児でも大人と変わらない機能を持っているのに対し、顕在記憶は誕生時には未成熟で、成長につれ発達していくものという見方が主流となってきている。 (Naito & Komatsu, 1993)。こうした考えに基づけば、生後しばらくの間に経験された出来事は、潜在記憶としては保持されていても、顕在記憶とはなっていないため、後に意識的にアクセスすることが難しいと考えられる。

記憶の符号化もしくは保持の失敗という説

幼児期健忘を説明するもう一つの立場は、その時期の記憶は、検索ができないのではなく、そもそも記憶の中に保持されていないために想起できないというものである。こうした立場では、出来事を適切に符号化したり、符号化した記憶を長期間保持したりするのに必要な器官や機能が、誕生直後は未成熟であるために、幼児期健忘が起これと考える。

幼児期健忘の原因が発達的な未成熟さに由来するという立場は数多く存在しており、記憶の符号化や保持に必要なものとして、海馬など脳神経組織の発達 (Nadel & Zola-Morgan, 1984)、言語発達 (Nelson, 1993)、因果推論の認知の発達 (Pillemer, Picariello, & Pruetz, 1994)、「心の理論」の発達 (Perner & Ruffman, 1995)、認知的自己の発達 (Howe & Courage, 1993; Howe & Courage, 1997) など、さまざまなものが指摘されている。

ただし最近の研究では、乳幼児がこれまで思われていたよりも長い期間、出来事の記憶を保持できることが示されており (Howe & Courage, 1993; Meltzoff, 1995; Rovee-Collier & Bhatt, 1993)、幼児期健忘の原因を、脳神経系や基礎的な記憶システムそれ自体に求めることが難しくなっている。こうしたことか

ら、Howe and Courage (1993) は、幼児期健忘の原因は、記憶の“ハードウェア”より“ソフトウェア”にあると主張し、「認知的自己」の発達が最も主要な要因であるとしている。彼らによれば、最初期記憶が形成されるためには、ある出来事が“私 (me)”に起きたものだとして理解される必要があり、それには、自己と他者とは分離した存在であるという認識が不可欠だという。これまでの研究では、鏡の中の自分を認識できる時期を18~24ヶ月、また“I”“me”“you”といった人称代名詞を獲得するのもこれくらいの時期としており、幼児期健忘の終結年齢とほぼ一致することが指摘されている。

親子の社会的相互作用という説

幼児期健忘の原因が検索失敗にあるという説明にせよ、符号化や保持の失敗にある説明にせよ、ここまで述べてきた理論はいずれも、幼児期健忘の原因を個人内のプロセスに求めている。しかし、近年の理論は、記憶が社会的に構成されるものであることを指摘している。

社会的相互作用理論によると、子どもは、親（やその他の大人）と過去の経験について会話することによって、どのように過去を語ればよいかや、過去の記憶を他者と共有すること重要性を学習していく (Nelson, 1993; Fivush, 1991; Hudson, 1990)。一方、子どもは、3歳になるくらいまでに、過去の出来事をストーリーの形（ナラティブ）で語るができるようになることがわかっており、これは幼児期健忘の終結時期と一致する。すなわち子どもが親との会話によって、過去の経験の語り方を覚えたとき、幼児期健忘が終結すると考えられるのである (Fivush, Haden, & Adams, 1995)。

Fivush らによると、過去の記憶について会話する際、母が子に働きかけるスタイルには2つのタイプがあり、どちらのスタイルを好んで使うかによって、子どもの記憶の量や質が影響を受けるという (e.g., Fivush, 1991; Reese & Fivush, 1993; Reese, Haden, Fivush, 1993)。すなわち、子どもの話を受容し、その内容を広げたり、付け加えたりしながら、子どもと一緒に経験を共有しようとする働きかけ（精緻化の高いスタイル）は、子どもが正しく答えられることを求め、同じ質問を繰り返すような働きかけ（精緻化の低いスタイル）に比べ、子どもの記憶に良い影響を与えるのである。例えば、Reese et al. (1993) は、子どもが40, 46, 58, 70ヶ月時の親子の会話を分析したとこ

ろ、40ヶ月時に母親が使っていたスタイルが、後の子どもの記憶を予測したことを示している。精緻化の高い働きかけをしていた親の子どもは、その後の想起場面で、より多くの情報を再生できたのである。こうした事実は、最初期記憶の年齢にばらつきがあることに一つの説明を与えてくれる。すなわち、親が精緻化の高い働きかけをした子どもほど、最初期記憶が早く出現する（幼児期健忘が早く終結する）可能性が考えられる。また、親が子に対して行う語りかけは、息子より娘に対しての方が精緻になる傾向が見出されているため (Fivush, 1994)、女性の方が最初期記憶の年齢が低いという結果は、親子の社会的相互作用の結果とも考えられる。

以上、ここまで、幼児期健忘を説明する理論を3つのカテゴリーに分け議論したが、ここで紹介した理論の多くは、幼児期健忘の「終結時期」とその理論において主要な要因 (e.g., 認知的自己) の「発現時期」とが重なるということをもって、それを支持する根拠としている。しかし、これは間接的な根拠にはなっても、個々の要因が幼児期健忘を規定しているという決定的な証拠にはならない。したがって、今後は、各要因を直接的に検討するような研究が増えて行くことが必要である。一方で、最近では、幼児期健忘は単一の要因によって説明できるものではなく、複数の要因の組み合わせで説明すべきだという立場も現れてきており (e.g., Welch-Ross, 1995)、幼児期健忘をめぐる論争はますます複雑化している。

幼児期健忘と回復された記憶

幼児期健忘は、理論的問題だけではなく、「回復された記憶 (recovered memory)」といった現実的問題との関連からも関心を集めている。回復された記憶とは、心理療法やグループ・セラピーの中で初めて思い出された幼児期の記憶のことである。

すでに述べたように、Freud は、幼児期健忘は乳幼児期に経験したトラウマ的事象を抑圧するための過程とした。現在では、多くの研究者が Freud の説には否定的だが、一部の心理臨床家は、摂食障害や抑うつといった身体的・精神的不適応症状の原因は抑圧されたトラウマ経験にあるとし、抑圧された記憶を回復することこそが治療に結びつくとしている。しかし、アメリカでは、心理療法などを通して回復された記憶をめぐり、大きな論争が引き起こされてきた (Loftus, 1993

b; Loftus & Ketcham, 1994; 高橋, 2002)。というのも、回復された記憶の中には、幼児期に家族から性的虐待を受けたといった内容が頻繁に現れ、家族が息子や娘に訴えられるというケースが頻発したからである。しかし、加害者とされた家族の中には、まったく身に覚えがないと主張する人たちが多く存在する。果たして、回復された記憶は、真実の記憶なのか、それとも偽りの記憶 (false memory) なのか。この問題について詳細に検討することは本論文の範囲を越えるが、今回取り上げた最初期記憶に関する研究から、回復された記憶の正確性について示唆される点を述べる。

最初期のものとして想起された記憶の正確性については、概ね正確とされるものの、不正確な記憶の割合も少なくないこと、また正確とされた記憶についても、疑問点があることはすでに述べた。特に、記憶は従来考えられていたような個人内のプロセスだけではなく、社会的に構成されるプロセスでもあるとの指摘から、記憶符号化時の経験だけでなく、その後の経験が、記憶を変容させる可能性も議論した。回復された記憶の場合、その内容は性的虐待といった特殊なものであるため、記憶内容が、その大局において不正確であったり、記憶そのものがのちに作り出されたものであったりするということは、にわかには信じがたいかもしれない。しかしこうした直感に反して、最近の研究は、外部からの情報によって、「偽りの記憶」がかなり容易に植え付けられることを示している (Loftus, 1997; Loftus, Coan, & Pickrell, 1996)。したがって、回復された記憶についても、メディアやセラピストなどの外部ソースから得た情報の再構成であるという可能性は否定できない。なお、回復された記憶は、心理療法やグループ・セラピーといった対人場面で行われる協同想起の産物であるということを考慮すると、記憶想起が単独個人で行われる最初期記憶の研究に比べ、さらに外部ソース (すなわち、協同想起場面での他者) の影響を受けやすいとも考えられる。ただし、協同想起が個人想起と比べ、記憶のエラーが多いことを明確に示す証拠はまだ十分ではなく (高橋, 2002)、今後の研究が待たれる。

本論文では、幼児期健忘と最初期記憶に関する研究をレビューし、現在までに解決できていない問題を中心に議論してきた。最後の節でも述べたように、幼児期健忘は、理論的な関心からだけでなく、現実的な問題との関連においても、興味深いテーマである。現

実的な問題として、ここでは「回復された記憶」という特殊な問題を取り上げたが、過去の記憶は一般の人にとっても重要な意味を持っており、例えば、自己定義の基盤、人生の方向づけ、行動調整、問題解決の手がかりといった機能があることも指摘されている (佐藤, 2002)。しかし、記憶の機能を直接検討しようと研究は、これまでのところ多くなく、今後はこうした点に着目した研究も必要であろう。

引用文献

- Dudycha, G. J. & Dudycha, M. M. (1933). Some factors and characteristics of childhood memories. *Child Development*, 4, 265-278.
- Dudycha, G. J. & Dudycha, M. M. (1941). Childhood memories: A review of the literature. *Psychological Bulletin*, 38, 668-682.
- Eacott, M. J. & Crawley, R. A. (1998). The offset of childhood amnesia: Memory for events that occurred before age 3. *Journal of Experimental Psychology: General*, 127, 22-33.
- Eacott, M. J. & Crawley, R. A. (1999). Childhood amnesia: On answering question about very early life events. *Memory*, 7, 279-292.
- Fivush, R. (1991). The social construction of personal narratives. *Merill-Palmer Quarterly*, 37, 59-82.
- Fivush, R. (1994). Constructing narrative, emotion, and self in parent-child conversations about the past. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative* (pp. 136-157). NY: Cambridge University Press.
- Fivush, R., Haden, C. A., & Adams, S. (1995). Structure and coherence of preschoolers' personal narratives over time: Implication for childhood amnesia. *Journal of Experimental Child Psychology*, 60, 32-56.
- Freud, S. (1953). Three essays on the theory of sexuality. In J. Strachey (Ed.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud* (Vol. 7, pp. 135-243). London: Hogarth Press. (原著出版 1905 年)
- Freud, S. (1963). Introductory lectures on psych-analysis. In J. Strachey (Ed.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud* (vol. 15, pp. 199-201). London: Hogarth Press. (原著出版 1916 年)
- Howe, M. L., & Courage, M. L. (1993). On resolving the enigma of infantile amnesia. *Psychological Bulletin*, 113, 305-326.
- Howe, M. L., & Courage, M. L. (1997). The emergence and early development of autobiographical memory. *Psychological Review*, 104, 499-523.
- Howes, M., Siegel, M. & Brown, F. (1993). Early childhood memories: Accuracy and affect. *Cognition*, 47, 95-119
- Hudson, J. A. (1990). The emergence of autobiographical memory in mother-child conversation. In R. Fivush & J. A.

- Hudson (Eds.), *Knowing and remembering in young children* (pp. 166–196), NY: Cambridge University Press.
- Kihlstrom, J. F., & Harackiewicz, J. M. (1982). The earliest recollection: A new survey. *Journal of Personality*, 50, 134–148.
- Loftus, E. F. (1993 a). Desperately seeking memories of the first few years of childhood: The reality of early memories. *Journal of Experimental Psychology: General*, 122, 274–277.
- Loftus, E. F. (1993 b). The reality of repressed memories. *American Psychologist*, 48, 518–537.
- Loftus, E. F. (1997). Creating false memories. *Scientific American*, September, 50–55.
- Loftus, E. F., Coan, J. A., & Pickrell, J. E. (1996). Manufacturing false memories using bits of reality. In L. Reder (Ed.), *Implicit memory and metacognition* (pp. 195–220), NJ: Erlbaum.
- Loftus, E. F., & Ketcham, K. (1994). The myth of repressed memory. NY: St. Martin's Griffin. 仲真紀子 (訳) (2000). 抑圧された記憶の神話：偽りの性的虐待の神話をめぐって 誠信書房
- Loftus, E. F., & Loftus, G. R. (1980). On the permanence of stored information in the human brain. *American Psychologist*, 35, 409–420.
- 三島由紀夫 (1950). 仮面の告白 新潮文庫
- Meltzoff, A. N. (1995). What infant memory tells us about infantile amnesia: Long-term recall and deferred imitation. *Journal of Experimental Child Psychology*, 59, 497–515.
- 森 津太子 (2002). 最初期記憶の年齢と特徴 (未発表論文)
- Mullen, M. K. (1994). Earliest recollections of childhood: A demographic analysis. *Cognition*, 52, 55–79.
- Nadel, L., & Zola-Morgan, S. (1984). Infantile amnesia: A neuro-biological perspective. In M. Moscovitch (Ed.), *Infant memory* (pp. 145–172), NY: Plenum Press.
- Naito, M., & Komatsu, S. (1993). Processes involved in childhood development of implicit memory. In P. Graf, & M. E. K., Masson (Eds.), *Implicit memory: New directions in cognition, development, and neuropsychology* (pp. 231–260), Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Nelson, K. (1993). The psychological and social origins of autobiographical memory. *Psychological Science*, 4, 7–14.
- 尾原裕美・小矢津孝明 (1994). 幼児期健忘に関する理論と今後の展望 哲学 (三田哲学会), 97, 155–172.
- Perner, J., & Ruffman, T. (1995). Episodic memory and autonoetic consciousness: Developmental evidence and a theory of childhood amnesia. *Journal of Experimental Child Psychology*, 59, 516–548.
- Pillemer, D. B., Picariello, M. L., & Pruett, J. G. (1994). Very long-term memories of a salient preschool event. *Applied Cognitive Psychology*, 8, 95–106.
- Pillemer, D. B., & White, S. H. (1989). Childhood events recalled by children and adults. *Advances in child development and behavior*, 21, 297–340.
- Pillemer, D. B. (1998). What is remembered about early childhood events? *Clinical Psychology Review*, 18, 895–913.
- Potwin, E. B. (1901). Study of early memories. *Psychological Review*, 8, 596–601.
- Reese, E. & Fivush, R. (1993). Parental styles of talking about the past. *Developmental Psychology*, 29, 596–606.
- Reese, E., Haden, C. A., & Fivush, R. (1993). Mother-child conversations about the past: Relationships of style and memory over time. *Cognitive Development*, 8, 403–430.
- Rovee-Collier, C., & Bhatt, R. S. (1993). Evidence of long-term memory in infancy. *Annals of Child Development*, 9, 1–45.
- Rubin, D. C. (2000). The distribution of early childhood memories. *Memory*, 8, 265–269.
- 佐藤浩一 (2001). 自伝的記憶 森 敏昭 (編著)・21世紀の認知心理学を創る会 (著), 認知心理学を語る (1): おもしろ記憶のラボラトリー (pp 15–36), 北大路書房
- 佐藤浩一 (2002). 自伝的記憶 井上 毅・佐藤浩一 (編) 日常認知の心理学 (pp. 70–87), 北大路書房
- Schacter, D. L. (1987). Implicit memory: History and current status. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition*, 13, 501–518.
- Sheingold, K., & Tenney, Y. J. (1982). Memory for a salient childhood event. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed* (pp. 201–212), New York: Freeman. 富田達彦 (訳) (1988). 観察された記憶 (上) 誠信書房
- 高橋雅延 (2002). 偽りの記憶と協同想起 井上 毅・佐藤浩一 (編) 日常認知の心理学 (pp. 107–125), 北大路書房
- Usher, J. A., & Neisser, U. (1993). Childhood amnesia and the beginnings of memory for early life events. *Journal of Experimental Psychology: General*, 122, 155–165.
- Waldfoegel, S. (1948). The frequency and affective character of childhood memories. *Psychological Monographs*, 62, Whole No. 291.
- Welch-Ross, M. K. (1995). An integrative model of the developmental of autobiographical memory. *Developmental Review*, 15, 338–365.
- Wetzler, S. E., & Sweeney, J. A. (1986). Childhood amnesia: A empirical demonstration. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory* (pp. 191–201), Cambridge: Cambridge University Press.
- White, S. H., & Pillemer, D. B. (1979). Childhood amnesia and the development of a socially accessible memory system. In J. F. Kihlstrom & F. J. Evans (Eds.), *Functional disorders of memory* (pp. 29–73), Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Winograd, E., & Killinger, W. A., Jr. (1983). Relating age at encoding in early childhood to adult recall: Development of flashbulb memories. *Journal of Experimental Psychology: General*, 112, 413–422.